



# 佳作

## 宇宙に夢中

古谷 耀

ぼくは宇宙が好きだ。なぜなら、宇宙にはなぜがいっぱいあるからだ。たとえばブラックホールは正体がつきとめられていない。強い引力を持っていて光も外に出られないそうさ。他には、光の強さがかわる星や大きさがかわる星もある。ガスだけでできた星というのも想像できない。そこに人はおり立てるのだろうか。そんなふしぎな宇宙は、たった百キロメートル上にある。近いのに遠い。ぼくはそのことを考えたら楽しくてドキドキする。でもこわい気持ちにもなる。自分が空気のない宇宙空間にいる気分にもなるし、わからないことだらけでおそろしくなるからだ。

### 1. ロケット打ち上げ見学

今年の八月に、初めてロケットの打ち上げを見に行った。場所は種子島。でも計画をはじめた時には種子島中のホテルはまん室だった。打ち上げの日が決まるとすぐに、全国のファンがさっとうしてホテルがうまったらしい。だけどぼくはどうしても行きたかった。今回打ち上げられるのはH-II Bロケットで、国際宇宙ステーション（ISS）に荷物を運ぶほきゆう船「こうのとり」をどうさいしている。ぼくは、「こうのとり」をのせたロケットが宇宙に行くところを見たかった。ぼくがくやしがつていると、お父さんがキャンプすればいいと言ってくれて、ねんがんのロケット打ち上げ見学に行けることになったのだった。

福岡から種子島までは遠かった。新幹線二時間、タクシー十分、高速船約二時間、そしてバスに一時間半。ようやく後でとまるホテルに着いて先に送ったテントを受けるけとった。それからテントの組み立てだ。テントをはる

「宇宙ヶ丘公園」からロケット発射場が小さく見えた。二、三センチほどの大きさしかない。でもとてもきれいだ。ぼくはテントをはる手伝いをした後で、見学場所の広場に行き、小さなロケットを見ながら打ち上がる所を想ぞうした。広場は大きくないからたくさんの人が入れるのかと心配になり、よい場所で見えるためにビニールシートで場所をとった。

打ち上げはよく朝の午前四時四十八分四十六秒。だからぼくらは夕食の後すぐにねて、三時に起きて、真っ暗の中広場に行った。もうたくさんの人がいて、おいていたはずのシートはなくなっていたけれど、なんとか空いている場所にすわった。周りの人はしゃべっているけど、ぼくはきんちようしていてずっとだまっていた。お母さんがお茶をくれたけど、ぼくは何も飲まずにじっと遠くのロケットがある場所を見つめていた。昼間は見えただのに、暗くて見えなかったのだ。

打ち上げ一時間前になると「エックスマイナス60分」というアナウンスが流れはじめた。ずいぶん待ったの

に、まだ一時間前なんだと思った。ぼくの近くにはジャクサのきかいがおかれています、時々ジャクサの人がチェックしに来ていた。ぼくは何をしているのか聞きたかったけれど、いそがしそうだったから聞けなかった。かんせい室からだけでなく遠い場所からもこうやってチェックしているんだと思うとぼくが思っているより打ち上げは大へんなんだと思った。

やっと十分前になり、「最終点けんが終わりました」というアナウンスが聞こえた。こんな発射ギリギリに最終点けんがあるんだとびっくりした。でもここでトラブルがあったら中止になってしまうから、最終点けんが終わったのなら、ぶ事にとんでくれるんだとホッとした。

八分前になると十秒ごとの秒読みがはじまった。いよいよかと、ぼくはすわりなおした。心の中でいっしょに数えながらドキドキしていた。

そして三分前。一秒ごとの秒読みにかわり周りもしずかになった。ぼくはきんちようして体がこわばった。

「五、四、三、二、一……！」

ビックバンのような明るさで火をふきだしてロケットは上にあがって行った。真っ暗な空の中であふれるような白っぽい光が上に進む。日の出のようだ。ぼくは思わず中ごしになって光の玉を見つめていた。「こののとおり」は今宇宙に旅立ったんだ。ぼくはとくべつな気分だったけど、頭の中は真っ白で何も考えられなかった。ただ、すごい、あれが宇宙に向かってるんだ、とだけ思っていた。

ロケットが見えなくなった後に、ふき出したけむりが一本のすじとなって白くのこっていた。後からあれは「ロケットロード」という名前だと知った。ロケットロードと朝やけがとてもきれいで、あれが宇宙につながっているんだと思った。

しばらくして「こののとおり四号きを分りました。成功です。」というアナウンスが流れた。ぼくは、ちゃんと分りして一人立ちさせてはじめて成功なんだと思った。そしてその後、北西の空に光るものが見えた。それ

はISSで、今のこのとりが数日後にドッキングするのだ。ドッキングする様子を想ぞうしながらテントにもどった。

## 2. 「宇宙新聞」発行

種子島からもどったぼくは、ますます宇宙がすきになった。マンガ『宇宙兄弟』をかりて読みふけたし、出かけた宇宙てんでは丸一日いてスタッフのおじさんにおどろかれた。宇宙てんではスペースシャトルで実際に食べられたという本物の宇宙食おもちをもらった。かんそうした白い四角のせんべいのような物を水にひたすと本物のおもちになった。これをISSで食べているのかなと思いつながら食べた。後から読んだ本で、宇宙飛行士だった毛利衛さんがこれを食べたと知ってうれしくなった。

夏休みの終わりには、イプシロンロケットの発射もパブリックビューイングで見た。さんねんなことにその時は十九秒前に打ち上げが中止になったけど、近くにいた

小さい子がロケットについてとてもくわしくてまげられないなど思った。年下なのにぼくより知しきがあることにおどろいたし、仲間だなと思った。その子のおかげで、イプシロンロケットの本を読んでくわしくなることができた。

十一月になって、ぼくは「宇宙新聞」を発行することにした。お母さんにすすめられたからだけど、やはりじめると楽しくなった。第一号はぼくが見たH-II Bロケットの打ち上げについて。第二号はイプシロンロケットについて。第三号は「火星人は本当にいるのか」というテーマにした。ちょうどその前に読んだH・G・ウェルズの『宇宙戦争』が、火星人が地球をおそう話だったからだ。今は火星に生命体がないことは知られているけれど、それでもぼくはとてもわかった。きっと昔の人は、火星には宇宙人がいて、地球をおそうかもしれないと思っていたんだろうな。実際に、大昔にラジオで火星人がせめてきた、とこの『宇宙戦争』を読んだら、聞いていた人たちが本当だと思ってパニックになったらし

い。ついでに他にも火星人が出てくる本をさがして読んでみた。本で読んだ火星人のすがたをぼくが絵にして新聞第三号にしようか考えた。ぼくは作っている内に、火星にはいなくてもどこかには宇宙人はいるんじゃないかという気になった。

その「宇宙新聞」を読んだ友だちはおもしろがってくれて次はないのかと言ってくれた。新聞、大成功。これで少しは友だちと宇宙の話ができるかな。

### 3. 飛べ！ぼくの火薬ロケット！

この前の日曜日に宇宙少年団で模けいロケットせい作があった。お父さんはかせでお母さんも仕事だったけど、ぼくは作れたかったから一人でさんかした。火薬を入れて飛ばすと聞いていたので金ぞくで作るのかなと思っていたら、わたされたのは強化ダンボールのつっだった。火薬でもえないのかなと少し心配になった。模けいロケットの中にはパラシュートを入れる。パラシュートはぬのと糸で作った。赤いパラシュートだ。つ

つの周りにはイプシロンロケットの模様の紙をはり、プラスチックでエンジン部分とフィンを作った。ほとんど一人で作り上げられまんぞくだった。打ち上げは午後からグラウンドで行った。そこで火薬をわたされエンジン部分につめこんだ。火薬はコルクみたいな形と大ききさで、においはしない。火薬の真ん中に穴が開いていて、そこにハリガネみたいな物をさしこんで押しピンでおさえた。火薬をつめこむ時は意外にこわくなかった。

ロケットを発射台にセットする。花火みたいに直せつ火をつけるのではないらしい。発射台は大きくて、そこに小さなロケットせつちの台が十ぐらいある。それぞれにコードがついていて、その先にはコンピューターがつながっていた。そのコンピューターのボタンを押すと電流が流れて火薬に点火されるシステムだ。本物のロケットみたいだ。ぼくらは発射台から四、五メートルはなれた。

「三、二、一、…！」

一台ずつちゃんとカウントダウンもしてくれて、ぼく

もボタンを押した。ぼくのロケットはグオオオという音を立てて大空に飛んでいった。い前作った水ロケットは風があると方向がかわり、飛ばない。でもこのロケットは風のえいきょうを受けない。ぼくのロケットも思ったよりスピードが出てすぐ豆腐ほどの大ききさになった。ぼくのロケットが宇宙に行った気持ちだった。でも本物のロケットとちがって、すぐに落ちてきた。しかもパラシュートも開かなかった。ロケットがこわれる、どうしよう、とぼくはあせった。ラッキーなことにその時風がふいたのでゆっくりと着地してロケットはぶじだった。失ばいの原因はパラシュートをおくにつめこみすぎたから出られなかったのだろう。

となりの男の子がロケットの中にダンゴ虫を入れて、ロケットがもどって来た時に「ダンゴ虫君、ぶじ帰かん」と言っていたのがおかしかった。でもその子はちゃんとパラシュートが開いたからダンゴ虫はつぶれずにもどってこれたのだ。今回はダンゴ虫を乗せても安全なロケットが作りたい。

高度計をロケットに入れて計ると、ロケットはみんな百三十メートルい上は上がったらしい。宇宙に着く百キロにはたつてないけど、ぼくにとってはりっぱなミニ宇宙だ。ぼくはしょう来、本物のロケットを打ち上げたし、宇宙も研究したい。

ぼくは、宇宙に夢中だ。